
思い出巡り

風宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出巡り

【Nコード】

N8959P

【作者名】

風宮

【あらすじ】

事故により亡くした彼女。その彼女の好きな場所で彼女との思い出を思い出す男。彼にとって彼女は生きる支えだった。そんな彼は彼女を亡くして何を思う。

初の短編小説なので勝手の分からない作者の作品。温かい目で見てもめると嬉しいですよ。

気付いたときにはここにいた。

ここはとある海岸。…彼女の好きだった場所だ。

彼女とは僕の幼なじみである、恋人だった。

好き『だった』、恋人『だった』というのは、彼女は既にこの場に、此の世に存在しない、過去の人だから。彼女は……亡くなったからだ。

交通事故だった。彼女はトラックに跳ねられたらしい。病院までは意識はなくとも、まだ生きていたようだ。

僕はその知らせを聞いてスグに大学を抜け出して、彼女の元へ向かった。しかし、運命とは残酷なものだ。

手術は成功せず、僕の到着を待たずに、彼女は死んだ。此の世からいなくなってしまった。

僕にとって、彼女が一番大切で、生きる希望であった。その彼女が死んだ。彼女の死で、僕の人生の意味がなくなった。生きる意味を失った。

僕は彼女の側で泣いた。悲しくて泣いた。苦しくて泣いた。悔しくて泣いた。

僕が小学校に上がる前に、事故で両親を亡くし、同居していた祖母によって育てられた。

当時の僕は、そのショックで毎日のように悲しみに明け暮れていた。何に対しても興味を引かなかった。一人、此の世に絶望していた。

祖父母はそんな僕の様子を見て、早い段階で諦めていたようだ。最初こそ、色々励まそうとしてくれたが、一ヶ月ぐらいで疲れてしまったようだ。その後は最低限の世話しかしてくれなかった。親戚どもは何かしてくれさえしなかったから、育ててくれたことには感謝している。

そんな中で、彼女だけは僕を元気にさせようと必死だった。

小学校に上がる前、近所に同じくらいの子供は住んでおらず、僕ら二人は幼稚園にすら通っていなかったせいか、友達と言えばお互いぐらいしかいなかった。

今思えば、遊び相手がいないから必死になっていたようにも思える。彼女は毎日、僕の家に来ては僕を外に連れだして、公園へ連れて行った。まともに遊具も置いてない、小さな公園だ。そこで毎日、いろんな事をして遊ばされた。

彼女は楽しそうだったが、当時の僕はとても不機嫌だった気がする。そしてある日、僕は聞いた。

「何で毎日僕を無理矢理につれてくるの？僕は楽しくないよ。そんな僕と遊んでて楽しいの？」 そんな憎らしい感じで聞いた僕に彼女は笑顔で言った。

「うんつ。ものすごく楽しいよっ！！決まってるよ。だって一人よりも二人の方が楽しいもん！！」

僕はこの答えにさほど興味を示さなかったような気がする。寧ろ、この後の言葉の方が響いた。

「それに、りつくん、いつも悲しそうだったから、元気になって欲しいから、一緒に楽しくなりたいたんだもん」

ただの言葉なら響かないだろう。だが、その言葉は弱々しい涙声で、さらには上目遣いだったのが決め手だったんだと思う。この時から既に、上目遣いに弱い男になっていたんだと思う。

その時不覚にもかわいいと思った。何にも興味を示さなかった僕がその時、久しぶりに他のことに興味を示した瞬間だった。

その後、しばらくの間は彼女の顔を直視できなかった。だが、次の日から嫌々遊びに行くことはなかった。その頃から、僕は両親の死からようやく抜け出せたようだった。

今となっては彼女との大事な思い出の一つだ。一番最初の思い出だ。

僕は波打ち際に近づいていき、海水に触れた。

冷たい。僕はその感覚から、僕は別の彼女との思い出を思い出した。

中三の冬、受験の真っ直中だ。そんな大事な時に、僕はそれ以上に大事なことを計画していた。

僕も彼女も、同じ高校を受験する事になっていた。そして受験当日の帰り、僕は彼女の好きなこの場所に彼女と共にきた。

僕らは波打ち際に立っていた。彼女は冷たい海水を手ですくって遊んでいた。

この時の僕は受験本番より緊張していた。心臓は早鐘のようで、息は荒く、気分は緊張を通り越して気持ち悪くすらなった。冷たい海水を触って、それを押さえようとしていた。

そんな僕の様子を見て、心配になったのか話しかけてきた。僕はそれに対してなんとか受け答えをして、深呼吸をした後に切り出した。

「だ、大事な話があるんだ」

そして、もう一度深呼吸して言った。勇気を振り絞って、一気に。「好きなんだ。ずっと好きなんだ。付き合って欲しい」

僕の急な告白にも関わらず、彼女はペースを崩さず言った。

「何時まで、待たせんのよ。バーカ。私だって、ずっと、好きなんだから」

そして、ゆっくりと僕に近づいてきて僕の目の前で止まった。

「この後、どうすればいいか。わかるよね？」

そう言った彼女は目を瞑り、少し上を向いた。何かを期待するかのように、僕の方に顔を向けていた。

僕は緊張しながら、彼女の頬に手を添えて、キスをした。ふれあう程度の子供のキスだった。

キスが終わると、二人で笑いあった。そして、仲良く手を繋いで帰った。

次の日、この様子を偶然目撃したクラスメイトに、よって冷やかされたのは余談だ。 そんな事も今となっては思い出でしかない。

僕は砂浜に寝転んだ。服が汚れるが、そんな事はどうでもよかった。

僕は上着のポケットに手を入れて、小さな袋を取り出した。中には小さなカプセル状の薬が入っている。

「そろそろ、良いよな……… 志乃。… もう、疲れたよ」

僕は袋の中からカプセルを取り出し、飲み込んだ。

勿論、中身は一応、『薬』だ。『毒』という名の『薬』だ。

僕は自殺するのだ。言わば、自殺志願の放浪者。

彼女との思いでの場所を巡った今、僕に此の世は意味のないものとなった。

実際、彼女の死から五年経っている。

その後、普通に就職してコツコツと稼いできた。その金で、薬代と旅費と『あるもの』を買う金を貯めた。

彼女の死んでからの人生は、今日、自殺するためだけにあったと言っても良い。

僕には、彼女しか無かったんだから。

意識が朦朧としてきた。『薬』…… いや、『毒』が効いてきたみたいだ。

この毒は即死することなく、徐々に効いてくるらしい。僕はその感覚に身を任せて、上着の内ポケットに入れてあった箱を二つ、取り出した。

僕は中身を確認した。それらはしつかり、箱の中に入っていた。中身は指輪。エンゲージリング、婚約指輪が入っている。

刻まれたイニシャルは『S・T』と『R・N』

彼女と僕のイニシャルだ。

それらをしまった。そろそろ時間のようだ。これが最後の言葉だ

ろう。

「今、そっちに行くから…な」

そして僕は目を閉じた。すると、彼女の姿が見えた。どうやら、迎えにきてくれたみたいだ。

― 今行くよ、志乃

（後書き）

初短編です。風宮です。読んでくれまして、ありがとうございます。

コレってジャンルは何になるんでしょうか？自分で書いてよくわからない。

そんな作者の書いた作品ですが、感想とか色々あったら嬉しいです。

そもそも、何を書こうとしたかと言うと、傷心男の思い出の場所巡り。結局、一力所しか書いてません。何でだろう？どこで間違えたんだろう？

それでも、話としては終わってしまったので、「このまま消すのは勿体無い」ということで、投稿してみた作品なのです。

こんな作者ですが、他にも連載小説ファンタジーやっていたりするんで、そちらの方も読んでもらえれば幸いです。それではっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959p/>

思い出巡り

2011年1月2日22時10分発行